



■主な内容

未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展（仮）」の開催にむけて
特集 小川信子から学ぶ継承と発展
「日本建築学会教育賞」受賞記念講演会から
小川信子先生に迫ってみました！－「継承と発展－考える・話す・創ることからの出発」
飯島静江さんを追悼する
賛助会員第1号からのメッセージ
会員の本『「建築外」の思想－今和次郎論』
魅力的なリノベーション No.12 会員方式で寺の庫裏を宿泊施設に改造－樹林寺



受賞記念講演会レセプションで、ドメス出版の飯島さんから祝辞を受ける小川名誉会長（撮影：井出幸子）

「未来へー女性建築家のパイオニアたちの肖像展（仮）」の開催にむけて

Towards the Exhibition "For the Future: Pioneering Women in Architecture from Japan and Beyond"

松川淳子 MATSUKAWA-TSUCHIDA Junko

昨2010年の建築界の大きな話題のひとつは、なんといても、妹島和世さんが西澤立衛さんとともにプリツカー賞を受賞したことであろうか。1979年に米国のホテルチェーンオーナーのプリツカー族によって創設されたこの賞は、これまで33人の建築家を選んで賞を与えて来たが、2004年にザハ・ハディッドを初の女性受賞者とした。妹島さんで二人目の女性を選んだことになる。日本では、これまで、丹下健三（1987年）、槇文彦（1993年）、安藤忠雄（1995年）と、3氏が選ばれていて、妹島・西澤コンビは、日本にとって4例目の受賞になる。

こうした例が象徴するように、日本における近年の女性建築家の活躍はめざましい。その一方で、日本で女性建築家が本格的に活躍を始めたのは、第二次大戦以降であり、「たかが60年余の」歴史しか持たない。一級建築士の中の女性の割合はというと、2009年度の合格率でみると2割を超えているが、東京建築士会の会員データでは、2010年9月現在9.9%にとどまっている。米国では、1995年にAIAが設立100周年を祝った展覧会をして、そこに、1888年、AIA女性会員の第一号に選ばれた、ルイス・ベッシュン（1856-1913）も展示され、日本より半世紀以上も早くから女性のこの分野への参画があることがわかる。

International Archive of Women in Architecture (IAWA)

は、1985年、UIFAのメンバー、ブルガリア出身のアメリカの建築家、ミルカ・ブリズナコフさんによって設立され、昨年25周年を迎えた。これを祝い、米国内では、すでに記念展が開催されているが、IAWAのアドバイザー会議では、巡回展として世界を回していくようにできないか、ということを検討し、日本でもその一環として、UIFA JAPONとIAWAの共催の形での計画が進んでいる。19世紀以来の世界の女性建築家の足跡をたどることにより、住まいやまちという空間創造における女性の参画が大きな意味を持っていることを次代の建築家たちに伝え、この分野への女性の参画を推進したいと考えている。

展示は、現段階では、日本のパイオニアたちとアメリカを中心としてIAWAが収集している世界の女性建築家のパイオニアたちの資料、UIFAやPODOKOの資料、UIFA JAPONの活動の資料などの展示と、年表、ビデオなども展示することを予定している。会期は、6月のUIFA JAPONの総会と合わせて日本建築学会のギャラリーで、9月にはUIAのために来日する世界の建築家に向けて、丸の内周辺で開催しようと計画中である。すでにこの展覧会のためのプロジェクトチームが発足し、UIFA JAPONあがての行事となり、忙しく準備を進めている。会員みなさまのご協力をお願いする次第である。

■第19回UIFA JAPON 総会+記念講演会 19th UIFA JAPON General Meeting

2011年6月11日(土) 午後：CIC（キャパシタティブ・センター）＝田町駅東口徒歩1分
記念講演：ドナ・デュネイ教授（IAWA）

■IAWA25周年記念（日本）展 Exhibition to Mark IAWA Center's 25th Year

：FOR THE FUTURE-Pioneering Women in Architecture from Japan and Beyond

6月展：2011年6月6日(月)～17日(金)：日本建築会館ギャラリー＝田町駅西口徒歩3分

9月展：2011年9月：UIA世界大会関連行事として開催 詳細未定

※展覧会の企画・運営に、皆様の参加を募っています。

特集：小川信子から学ぶ継承と発展

2010年7月3日の小川名誉会長の受賞記念講演会（日本女子大学住居学科、日本女子大学住居の会（住居学科同窓会）共催UIFA JAPON 後援）のタイトルは「継承と発展—考える・話す・創ることからの出発」だった。小川先生が継承されてきたもの、後輩達に発展させて欲しいと願っているもの、我々が小川先生から継承していきたいもの…。講演会の内容を一部ではあるが紹介し、考えていく手掛かりとしたい。また、ものづくり教育の現場に携わる宮本伸子さんにインタビューをお願いし、小川先生の豊富な出会いを浮き彫りにしつつ、ご自身の「継承と発展」を考えてもらった。

（石川和代 ISHIKAWA Kozuyo）

「日本建築学会教育賞」受賞記念講演会から Commemorative Lecture for the AIJ Education Prize



- ① 1951年、小川信子の原点である卒論「団地住宅に於ける幼児施設」では戸山団地の子ども達の生活調査を徹底して行った。生活・空間の使われ方を調査して、設計、研究するというスタンスは、この時から変わらない。
- ② フレーベルやモンテッソーリ等、幼児教育の学説は多々勉強したが、とりわけ「20世紀は児童の世紀である」と、その著作『児童の世紀』で謳い上げてくれたエレン・ケイとの出会いは、「幼児教育をどう考えていくか」の指針を示してくれた。
- ③ 土浦亀城事務所時代の1953年、女性の仲間が集まり「PODOKO」を結成。見学会や機関誌発行等を行い、未だ数も少なく、一人の力の弱かった建築界の女性達が、協力して男女差別等についても社会に発信していった。写真は、広瀬鎌二郎見学会の時のもの。
- ④+⑤ 2年続けて日本女子大から助手として招請された1955年、「教育とは共に育つこと」という言葉を思い出し、迷いを振り払って教育の世界に飛び込んだ。以後、保育の考え方や保育施設のあり方を考え、設計し、研究していく。1964年の三ヶ月にわたるノルウェーのオスロから香港までの旅行の途中、ドイツのマールブルグでシュタイナー設計の幼稚園を見学。直角のない平面等、シュタイナーの思想がそのまま空間に現されている。雑誌「保育」に小川が紹介したドイツの幼稚園の中でもシュタイナー設計の幼稚園が取り上げられている。
- ⑥ 1986年、研修制度で、スウェーデンのストックホルム王立工科大学へ長期留学。写真は、ストックホルム中央駅の文化会館の子どもの自由保育所。子どもの施設ばかりでなく高齢者住宅やコレクティブハウジング、さらにコレクティブの考え方をエリアにまで広げた事例等、スウェーデンに学ぶことは沢山あった。それらの研究成果は多くの著作となって世に出ている。
- ⑦ 2004年、再びストックホルム王立工科大学へ留学。留学中、本屋でエレン・ケイ著『日常の美』に再会。「生活を美しく」という言葉に導かれるように陶芸家、藤井恵美さんとの共著『スウェーデン 陶器の町の歩み—グスタブスベリイ保存と再生—』が実現した。
- ⑧ 2007年、エレン・ケイのストランド荘を訪問。卒論で出会ったフレーベルとエレン・ケイ、フレーベルの恩物で育てられたライト、エレン・ケイの著書を共訳で米国で紹介したライト、ライトの弟子の土浦亀城の下で初めて実務についた自分……。彼らは小川信子の歴史のスパイラルな時間の中で、何度も出会ってきた気になる人々である。幼児教育とスウェーデンを重ねながら、これらの人々を更に知ることで自分の継承を振り返り、それを皆さんに語ることでバトンを渡してゆきたい。
（文責：石川和代 写真提供：小川信子）

小川信子先生に迫ってみました！—「継承と発展—考える・話す・創ることからの出発」

An Interview with OGAWA Nobuko: Inheritance and Progress

宮本伸子 MIYAMOTO Nobuko

2010年7月3日の「日本建築学会教育賞」受賞記念講演会から半年後、小川先生が創り手として、また教育者として実践してこられたことに、もう一步迫りたいということで、12月22日に先生へのインタビューをさせていただきました。

沢山のの人たちと出会っておられますが、どのように影響を受けられましたか？

私たちの時代は、大学の枠に縛られずに色々な先生の所に入っていました。早稲田の今和次郎先生、吉阪隆正先生には学生時代から教えていただきました。卒論で子供のことを取り上げるということで、吉阪先生の後を継いだ須田先生から当時子供の研究をしていた川添登先生や児童施設研究所をやっておられた河野先生を紹介していただきました。河野先生から建築計画の面から吉武泰水先生を紹介され、更に文部省の天城勲さんを紹介され幼児施設委員会に出席するといった形で、それぞれから影響を受けてきたのです。

建築の計画という意味では、吉武先生からのプランニングの考え方の影響が大きかったと思います。吉武先生は形から入るのではなく、生活をよく観察して調査し、その上で「もっと良くなる状態にする」のが設計だという考え方でしたから、卒論の時から子供の教育内容の調査をやった私にはわかりやすかったのです。



児童の世紀 (小野寺信・百合子訳、1979年版 富山房百科文庫 24)

一方で、川添先生からは白井辰一先生の住宅の見学に誘われて白井建築と出会い、「思想が建物になっている」と感じ、デザイナーとしての影響を受けました。特に、村井保育園を設計した時は、白井先生に図面を見ていただいています。

エレン・ケイには、卒業論文のときに図書館で「児童の世紀」(原田実訳)と出会って以来の不思議な縁を感じています。卒論テーマの幼児・児童教育の今後の方向について、どの先生からも明確な指針がなくて困っていた私にとって、そこには「20世紀は子供の世紀である(べきだ)」とはっきり書いてあり、一所懸命読みました。その後、この本は完全な翻訳書が出たので(1979年版)、今でも大切にしています。

卒論の時から一貫して幼児教育をテーマとされたきっかけは？

そもそものは戦争体験からです。女学校のときに学徒動員で下町の工場に行っていたのですが、空襲に襲われました。空襲が終わった後、御徒町の方まで友達と歩いて戻り隅田川の橋を渡るのですが、親を亡くしたりした子供たちと沢山会うし、人は沢山亡くなっているし、こちらもまだ女学校の生徒なので泣きたいぐらいでした。その後、大学で卒論を書くことになって、子供のことをやりたい、子供たちのことをどうにかしなくてははいけないと考えたのです。

卒業後に就職した土浦亀城建築事務所の土浦先生には、大学に

戻ってから幼稚園の設計を依頼されて基本設計をさせていただきました。その後、卒業論文で調査した労働者クラブ保育園をはじめ色々な保育園、幼稚園を設計してきました。その中には、一斉保育ではなく、一人ひとりの子供に向き合う「つたえあい保育」を行う保育園の設計をしてきました。つたえあい保育は、労働者クラブ保育園の畑谷副園長や法政大学の乾孝先生がすすめておられたものです。

新建築に掲載する時には、「子供がいない幼稚園の写真などを掲載していただく気持ちはありません」とお断りしたところ、当時(1960年)としては珍しく子供が写っている写真が掲載されました。

PODOKO から UIFA JAPON へ、女性の建築家の歴史とネットワークをどのように見ておられますか？

PODOKO は、近藤洋子さんと田中温子さんを中心に、モダンリビングの渡辺曙さんや浜口ミホさんを通じて「色々な事務所に女性がいらしい」という情報を得て、「みんなどうしているのだろうか？」という気持ちから、集まったもので、私は土浦事務所に在籍していました。(1953年9月14日に発会式、約30名が参加)。

最初は、みんなの給与などを調べて、給与が少ないところには、みんなで交渉に行ったりもしました(笑)。

それから雑誌に台所のことなどの男性では書けない記事を書いたり、当時活躍中の先生方の建物を見に行き率直な意見を述べたり学んだり、色々な活動をしました。基礎ができたので次の世代に引き継ぎ、その後なんとなく解散をしたような形になりました。

UIFA は、パリで第一回大会の開催(1963年)により設立されました。その時に中原暢子さんと小林知恵子さんが日本代表として出席し、PODOKO の存在を世界の参加者に話して、すっかり日本が興味を持たれたということです。

講演会の「継承と発展」というのは、継承は私が引き継いでできたこと、発展というのは私から若い人たちに引き継いで発展させて欲しいということでした。PODOKO から UIFA JAPON へという女性の建築家の任意のネットワークの中で女性たちが本当の意味で自立して行って欲しいと願っています。そして、継承から発展のために、今までの女性の建築家の系譜をもう一度整理し、若い人たちがもっと UIFA JAPON に参加して、世界的な視野を持った時代が築かれていくことを期待しています。

講演会とインタビューで、小川先生が継承されてきたことは実に幅広く、建築、住まいという範囲などは大きく超えて、人々特に子供たちに暖かい目が注がれていることが感じられました。ともすれば日常の仕事に追われ、本質を見失いがちな私は、先生のまなざしと背筋がピンと通った生きざまに学び、次の世代に少しでも発展するように繋いでいきたいと考えて始めています。

飯島静江さんを追悼する Memorial Address for IJIMA Shizue



(撮影：野田杏菜)

UIFA JAPON 設立時から広報担当として尽力された飯島静江さんが、昨年10月13日に逝去された。私が飯島さんに初めてお会いしたのは、UIFA に入会した1996年。ニュースレターの編集などを通して、沢山ののことを教えていただいた。

まだワープロの頃、ニュースレターの版下は、飯島さんが日建設計で多忙な仕事の後でつくっていた。夜遅く飯田橋のオフィスで最終校正したこともある。大変なときでも見えないところでの苦勞を口にされることはなかった。IBM 本社ビルなどの高層建築や日本各地の空港の設備設計を担当してきた飯島さんは、簡潔な文章とすっきりしたレイアウトを重視しておられ、妥協を嫌った。神田生まれのまっすぐな人柄、テキパキしつつも、実に細やかな優しい方で、私が博士論文を終えたときも喜んでくださった。退職後に移り住んだ三浦市油壺のお部屋には、ガラス器など美しいものが少しだけ飾られていた。

UIFA が生きがいだったとお兄様から伺った。長い間お世話になりました。終の棲家である三浦の地でゆっくりお休みください。

田中厚子 TANAKA Atsuko

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2011年2月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

■ 賛助会員第1号からのメッセージ

Message from a New Supporting Member

ものつくり大学 河内眞作 KAWACHI Shinsaku

第50回海外交流会の会 UIFA SEOUL 報告の集い(2010年11月27日開催)に参加した。第16回のUIFAの世界大会がソウルだったということで、かれこれ15年前にソウルを訪れたことを思い出し、当時のスケジュールと写真を引っ張り出してみた。目的は全く違うとは言え、同じ都市に足を踏み入れているはずなのだが、今回の報告会の映像から思い返してみると全く違う街のようだ。高層のマンションがたくさんあり、近代的な博物館で会議が行われたということであったが、かつてのソウルはもっと昔の(戦後あまり経っていないころの)日本のようだったという記憶がよみがえってきて楽しくお話を聞くことができた。

私がUIFA JAPONの活動に関わるようになって1年半が過ぎようとしている。最初のきっかけは、同僚の宮本伸子さんの「壁塗りワークショップ」への参加だった。そこで、長岡市小国町法末で災害復興見守りチームの方々との出会いがあった。その後、法末復興祈念の「はつがま茶会」で小川信子前会長や多くの会員の方々にお会いすることができた。私にとっては幼い頃にお爺ちゃんお婆ちゃんが住んでいた鳥取の田舎の風情が重なり、今では法末が私にとって第二の故郷になっている。これからも法末での活動とともにいろいろなUIFA JAPONの催しに参加し、私自身の活動の輪を広げて更に多くの会員との交流を楽しみにしている。

■ 法末より(2011/1/16) Report from Hossue, Niigata



法末雪の切りとおし (撮影:伊達美徳)
今年の法末は久しぶりに豪雪の地にふさふさしく4m以上も積もり、わたしたちの拠点民家「へんなかフェ」も雪にすっぽりと埋まって押しつぶされる寸前。高齢になった集落民には、来る日も来る日も雪掘りする暮らしは難儀なようです。(撮影者談)

■ 訃報

1月12日、会員の峯成子さん逝去。
葬儀には教え子の方々も参列され、温かくお見送りされたそうです。謹んでお悔やみ申し上げます。

■ 役員会報告

第8回11月16日(2010年)総務の活動、NL85号の企画内容等編集経過、法末オープンガーデン植栽及び2011年カレンダー制作等報告、パンフレット委員会から部会への活動に、またHP委員会から部会への活動に移行報告。国際大会報告書の作成について、第51回海外交流会の会について、UIA2011年千人茶会の準備について、IAWA展示会について、会員制度について等審議。他情報提供。
第9回12月15日(2010年)総務の活動、NL85号発送及び86号企画、法末活動の経過、パンフレット部会の活動、HP部会の活動、海外交流会の会、UIA2011年千人茶会の会話教室について等報告。国際大会報告書の作成について、KIFA日本建築ツアー協力について、次年度総会会場等について、IAWA展示会について、パンフレット部会について審議。他情報提供。
第10回1月19日(2011年)海外交流会の会について報告及びチラシ承認、国際大会報告書の作成について協力依頼、KIFA日本建築ツアー協力について報告、UIA2011年千人茶会の協力依頼、IAWA展示会についての経過報告と協議等。

■ 会員の本 Member's Publication

『「建築外」の思考-----今和次郎論』

黒石いずみ著 ドメス出版

Kon Wajiro : A quest for the Architecture as a
Container of Everyday Life

by KUROISHI Izumi

この本は、まずペン大での著者の博士論文として英文で提出されたものである。

今(Kon)は柳田國男と日本各地を旅し、風土から読み込んだ農村生活や、日用品や因習も含む人間観察を丁寧なデッサンで綴り「生活学」を生み出した。又、都会での人々の流行や行動パターンを時間軸で記録して行く「考現学」も見事なドローイングで丹念に描写されている。動線・機能・寸法を網羅した心地良い建築を工芸だとし、木造多層構造の設計をしたことが図面、写真、パースで紹介されている。

近代建築史上の人々を自分の目で見据えていた今に対する著者の共感が文面にあふれ、多様な文献に基づく多彩な論証法で今とその時代に迫っている。

中野 晶子 NAKANO Akiko



■ 魅力的なリノベーション No.12

会員方式で寺の庫裏を宿泊施設に改造—樹林寺

Attractive Renovations #12: Renovating a Buddhist Monk's Residence into an Inn

桜で有名な高遠城址の前を通り過ぎ、更に登りつめたところに樹林寺はある。創建1601年、そののちの城主保科氏が、元の領地(千葉)にあった観音像を移し、祈願寺としたという。今回のリノベーションはこの庫裏。一級建築士の市村倅子氏が30年という期限を切ってここを借り受け、地域を含む数名に声掛けをし、約4000万円の資金を集めリフォームしたのが15年前。寺の住職は他に住み、荒れ果てた庫裏に泊まるようになったのがきっかけだった。構造を組み直し、一部天井を外して大きな空間も確保。浴室やトイレ、床暖など新しい設備を持ち込んで、快適な居住空間を整えた。会員方式で、資金を出した者がここをさせる仕組みである。放置すれば朽ち果てる運命の建物を現代に蘇らせる知恵として、この方式も使えるのではないかと。

(須永 淑子 SUNAGA Yoshiko)



市村氏から経過を聞く在塚さん、寺本さん

■ 編集後記

KIFA老若混合の良き旅初日同行!さて我!UIFA再考(渡邊)建築への真摯な目に空間も人も響き合うKIFAの旅(中野)皆で明るく越える師走年度末介護に家事育児(黒石)2011はUIFA JAPON節目の年になるかもしれません(在塚)京の冬、雪残るウインターガーデンもまた良し(須永)テイネンを前に思う。初期の実務も、最後の実務も幼児施設、何を継承し発展できたか?(井出)小川先生の取材へ同行。生活の美を体感!(飯田)インフルエンザにやられながらの編集作業でした。皆様ご自愛を!(石川)継承と発展、先輩たちのエネルギーは私たちに繋がっている(古村)